

【研究ノート】

メディアとしての絵葉書

The meaning of postcards as media

田 邊 幹

Motoki TANABE

絵葉書の持つ意味

絵葉書は単なる写真ではない。

加藤秀俊は『明治メディア考』の中で「人と人をむすぶはたらきをするもの - そのすべてを「メディア」ということばで呼ぶならば、ずいぶんといろんなものがメディアでありうる。」とメディアを捉えており、そのなかで絵葉書もメディアの一つ、と捉えている。メディアをこのように広く捉えた場合、絵葉書には二つのメディア性がある。一つ目は絵葉書の販売者から購買者へ、二つ目が差出人から受取人へ、である。一つ目の情報伝達媒体としての役割では、作り手、つまり特定の間人が、不特定多数の間人を対象に情報を伝える。この意味で、絵葉書のこの側面はマスメディアであると言える。絵葉書は売するために作られ、その写真は売り物になるという理由で写されたものである。つまり、絵葉書の画面は当時の人々の関心が写っているのである。そのため、絵葉書は古写真として須藤功氏らが試みた「一枚の写真の持っているものすべてを引き出し」「一枚の印画にはいかに多くのことが写しこまれ、その一つ一つを探求することで、実にさまざまなことを知り得る」という研究方法以上の、その印画の奥に隠された当時の一般の人々の感覚や関心を知ることができる資料であるといえるだろう。そのような意味で絵葉書は古写真以上の可能性を秘めている。

また、二つ目のメディア性では特定の差出人から特定の受取人に情報が伝達される。このとき、一つ目で伝達された情報も同時に伝達される。基本的に差出人は受取人にこの画面の情報を伝えるために絵葉書を選ぶ。絵葉書によって差出人から受取人に伝達される情報は通信文の情報 + 画面の情報なのである。

この二重のメディア性こそが絵葉書が新聞や錦絵など他のメディアと大きく異なる点である。このような点に留意しつつ、明治末～戦時中における絵葉書の画面とその奥にあるメディアとしての絵葉書を受容した庶民の感覚、歴史的な位置について検討したい。

絵葉書研究史整理と本稿の課題

歴史資料として絵葉書に真正面から取り組んだ研究は未だ見られず、絵葉書の資料学・書誌学はまだ構築されていない。絵葉書が歴史史料として広く使われるようになるためには、絵葉書のテキスト批判の方法論が確立されなくてはならないだろう。

佐藤健二氏は絵葉書関連の文献を3つのまとまりに分けている⁽³⁾。まず一つ目のまとまりとして、日本に絵葉書文化が生まれた当時が上げられる。これらは、『絵葉書月報』『ハガキ文学』などの雑誌に所収されたものが多く、絵葉書ブーム当時に生きた人々の関心、心情を表すものである。二つ目のまとまり

として、樋畑雪湖『日本絵葉書史潮』をはじめとして、絵葉書ブームを回顧するように様々な著作が出されている。三つ目として1980年前後から、ニール・ペドラの『横浜絵葉書』や小森孝之『絵葉書明治・大正・昭和』など、収集家のコレクションを編集する過程での考察が進んだ。また、絵葉書の写真資料としての側面を利用し、絵葉書を通して景観や風景を見ていく研究も盛んに行われた。このような研究傾向を佐藤健二氏は「孤立した探索」とまとめている。このような段階を経て、少数ではあるが、絵葉書を趣向の対象品として見るだけでなく、その資料的価値の高さに着目した論考が見られるようになる。佐藤健二氏は「絵はがき覚書」において絵葉書の様々な側面を掘り下げ、絵葉書をメディアとして捉えることを試行している。また、斎藤多喜夫氏は絵葉書の製作者を析出するとともに、絵葉書は画像媒体として浮世絵と同じく浮世、つまり社会の諸事象を写すものであることを指摘している⁽⁵⁾。さらに、近年、絵葉書を受容した社会のあり様を分析したものとして、島津俊之「師範学校による絵はがきの収集と郷土教育 - 和歌山県の師範学校を例に - 」と今野由佳里「絵葉書の流行」がある。前者は絵葉書が、当時の師範学校をとりまく社会情勢のなかで、いかにして郷土資料として認識されるようになっていったのか、について分析し、後者は札幌 - 小樽 - 函館の絵葉書ブームの特徴を析出している。

このように、絵葉書という「資料」を取り上げた研究は散見されるものの、絵葉書そのものを「資料」として分析した研究は数少ない。絵葉書が当時の風景や世相を写すものであったことは漠然とは知られているが、それが歴史史料、並びに民俗資料として十分に活用されているとは言いがたいといえるだろう。そこで、本稿では情報伝達において大きな役割を果たした（メディア、特にマスメディアとして）絵葉書に注目し、絵葉書が隆盛した明治末期から昭和初期にかけてのこの種の絵葉書の実態について分析する。

マスメディアとしての役割を持つ絵葉書

ここでは絵葉書がマスメディアとして果たした役割の諸相を見ていく。

(1) 戦役記念絵葉書・プロパガンダ

明治33年、私製葉書の国内使用が認可され、絵葉書の使用が認められた。

明治27年の日清戦争から昭和20年のポツダム宣言受諾による太平洋戦争の終結まで、近代日本と国民は断続的に戦争を経験する。絵葉書はこの間、戦争の情報を国民に知らせるという役割を担っていた。

戦場の様子が初めて絵葉書になったのは日露戦争であった。遼陽会戦（図1）・沙河会戦（図2）などの様子が「戦捷記念絵葉書」として国民に知らされた（図3）のである。その他、第一次世界大戦時の

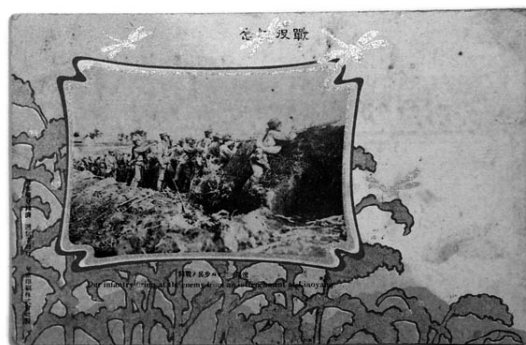


図1 日露戦役記念絵葉書 遼陽会戦



図2 日露戦役記念絵葉書 沙河会戦



図3 戦役記念絵葉書目録絵葉書

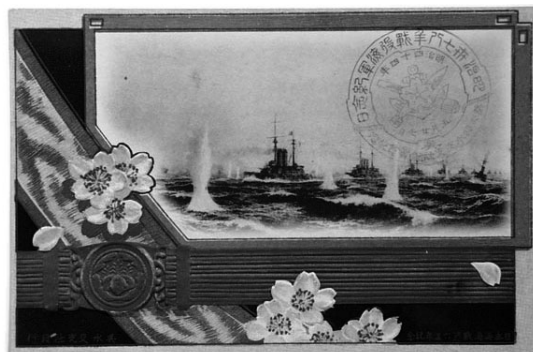


図4 日本海海戦六周年記念絵葉書



図6 ゼイタクハ敵



図5 躍進日本と将来の不安

チンタオ攻略、上海事変などの絵葉書も発行された。それぞれの凱旋記念の絵葉書も多数発行され、国民の喜びを表しているといえよう。

さらに、戦役記念の絵葉書には、戦争をニュースとして国民に知らせる役割だけでなく、その事柄を記憶させる、想起させる意味があったと考えられる。日本海海戦を記念する絵葉書が何周年記念絵葉書（図4）という形で継続して出版され、日清戦争を

記念する絵葉書でさえも時代を遡る形で出版されている。日本海海戦の勝利が日露戦争の「勝利」を決定づけたものであるとされ、T字戦法をとったという幻想が定着し、東郷平八郎が神格化されるに至り、いわゆる「日露戦争観」が語られることがその後の戦意高揚の世論形成に大きな意味を持ったとされているが、絵葉書もこのような世論形成の一翼を担ったと考えられる。戦争がニュースであったことは言うまでもないが、戦役記念の絵葉書は単にニュースを伝えるだけにとどまるものではなかったのである。戦意高揚のプロパガンダも絵葉書になっている。海軍の軍事力や航空戦力の各国比較（図5）はグラフという視覚に訴える方法と、絵葉書という手軽で広い階層に受容されていたメディアの相乗効果によって軍事力不足を国民に植え付け、軍部の軍事力増強を支持する世論を形成しようとしたものである。また、「ゼイタクは敵だ」などの戦時標語の絵葉書（図6）や国民精神総動員の絵葉書（図7）は、戦時体制強化のプロパガンダの役割を果たしたものである。

また、「日本兵士と支那子供」（図8）に代表されるように、戦場のイメージを形作るものとしても絵葉書は使われている。この絵葉書には、前線での苦戦、飢え、現地住民の反発など日本軍に都合の悪い情報は描かれず、逆に、絵葉書には敵には勇ましく、現地住民にはやさしい、英雄化された日本兵の姿



図7 兵隊さんは命がけ私たちが襷がけ

が描かれている。このような絵葉書は軍事郵便用に作成されたものと推定され、戦時下の情報統制に利用された。国民は軍事郵便を書く、受け取るという行為によって戦争に参加したのである。そして、その戦争とは、実際に戦場で繰り広げられた浪費や暴力ではなく、正義のための喜ばしいもの、つまり「聖戦」であった。

(2) 震災絵葉書・災害絵葉書

ニュースを伝達するものとして最もよく知られているものが関東大震災などの災害を写し出したものである。(図9、図10、図11)このような絵葉書は現在の「美しい」絵葉書からは想像できないものである。

関東大震災の絵葉書については佐藤健二氏が「絵はがき覚書」の中で、作り手、売り手の存在を含めて詳しく言及している。佐藤氏は作り手である光村印刷所の「光村利藻伝」や、震災後東京を飛び回った三宅克巳の回想などを素材に、3日位から写真を撮り始めたものがいたこと、7日頃には被服廠の絵葉書が発禁になったこと、罹災して家を失った人が絵葉書を仕入れて売っていて東京地図などとともに飛ぶように売れたこと、上京した救護の青年団などが絵葉書購入者として想定できること、などを指摘



図8 日本兵士と支那子供

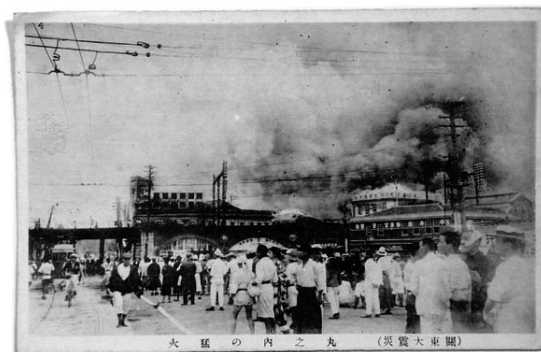


図9 丸之内の猛火



図10 焼失前上野駅前避難民の群集



図11 老原の惨状死骸者山を成す

している⁽⁸⁾。

また、新宿歴史博物館特別展図録『巷の目撃者』⁽⁹⁾では6枚刷り、8枚刷りの絵葉書が裁断されないまま売られていたものが紹介されており、一刻も早く販売するための措置と考えられている。また、図11の絵葉書は通信面が無地なのであるが、これも一刻も早く販売するための措置であり、そのためには絵葉書本来の役割である「送る」という行為は二の次になったのである。

図12の絵葉書は東京大洪水の絵葉書を実際に使ったものである。この絵葉書で、東京の差出人は新潟の受取人に対して、新聞で新潟の洪水の記事を読んだこと、東京の自宅は被害もなく無事であること、旅行中で見舞いの御礼が遅れたこと、を伝えている。この内容は絵葉書の画面の内容を生かしたものであり、画像を送るといふ絵葉書独自の機能がもたらした使用法である。

このように震災や災害の場面を写した絵葉書は画像を送るといふ絵葉書本来の目的をベースにしながらも、(最新の)画像を所有する、収集するという意味合いの強いものであったといふことができる。このジャンルの絵葉書は大正12年の関東大震災を最後に殆ど発行されなくなっている。この点については後述する。

(3) 天皇の絵葉書

天皇を巡るさまざまな儀礼も絵葉書になっている。(図13、図14、図15)

T・フジタ二氏は明治天皇の葬儀は政府指導者たちにとって大きな意味を持ったことを指摘している⁽¹⁰⁾。広く知られているように、当時、明治天皇の死は一つの時代の終わりを象徴する出来事ととらえられていた。政府は引き続き政権を維持していくために、「国家の安寧と国家共同体の恒久性の象徴であった天皇が死期に近づいたことで、近代天皇像の創造者たちはいまや衰弱し、重い症状にある生身の天皇を不朽の「天皇位」から儀礼的に引き離そうとしはじめた⁽¹¹⁾」とされる。そしてこの儀礼は1万人を超える儀仗兵と、宮廷装束を身に付けた供奉の者によって、文明国日本と神国日本の両方を象徴していた(図16)。



図12 千住大橋消防夫防止ノ壮挙



図13 御即位大礼記念



図14 大婚満二十五年記念



図15 皇太子殿下御帰朝記念

このような天皇を巡る様々な儀式は当時の人々の強い関心の対象になったとともに、政府の側から見ると、天皇の神聖性をイメージづけ、天皇主権国家、立憲君主制国家という体制を維持するうえで、重要な役割を担ったと考えられる。また、図17、図18の「万民の悲泣」は「帝国臣民」の想い、あるべき想いを写し出し、天皇と臣民の関係、あるべき関係を写し出している。

このような天皇の儀礼も絵葉書になっている。これは天皇の儀礼が国民の関心事であったとともに、天皇の儀式を国民に公開することによって国民に天皇中心の国家であるということを確認させる意味があったと考えられる。

天皇の肖像写真も絵葉書の題材になっている(図19、図20)。石井研堂『増訂明治事物起原』⁽¹²⁾によると天皇の写真は4種類しかなく、その管理も徹底されていた⁽¹³⁾。その上で、絵葉書などで写真の複製許可を出している。このことは、多木浩二氏が指摘する肖像写真そのものよりも、写真を扱う儀式に天皇の権威性を見出していたことを表すものであり、「御真影」⁽¹⁴⁾崇拝に繋がる考え方である⁽¹⁵⁾。

また、「御真影」として崇拝された写真自体も絵葉書になっている(図21)。明治天皇の画像は無数に描かれているが、それらの上半身は全てお雇外国人キュッソーネによって描かれた肖像画に拠っている。



図16 先帝御大葬 (明治天皇)



図17 宮城前二於ケル臣子ノ熱誠



図18 親子哀悼ノ悲泣



図19 大行天皇陛下最近の御尊影



図20 明治天皇 明治神宮全景

この肖像画は「理想的な君主像」をあらわす「御真影」として使われた。「御真影」は下賜されることによって天皇と臣民（臣下）の関係を構築する機能を果たした。この絵葉書で注目すべきは、この絵葉書の製作者が京城日報であることである。この絵葉書は通信面の書式から明治40年～大正7年に作られたものである。⁽¹⁶⁾ さらに韓国併合が明治43年であるから明治43年以降の製作であると考えられるだろう。また、絵葉書の画面にはキャプションが何も書かれていない。明治天皇死後のものならば、現在の君主ではないという注記がされているか、大正天皇が理想的な君主として描かれなくてはならず、明治天皇死後のものとは考えにくい。このため、この絵葉書は明治43年の韓国併合から明治45年の明治天皇崩御までの期間に発行されたものである可能性が高い。日本政府は植民地の情報統制のために日本寄りの新聞しか発行が認めなかったため「京城日報」が反日本的な目的でこの絵葉書を作製したとは考えにくい。逆に、明治天皇を理想的な君主として韓国の人々に知らしめる目的があったと考えられる。絵葉書は日本だけではなく、植民地となった国々でもプロパガンダとしての役割を担った。

(4) 広告絵葉書

広告の絵葉書というとDMを思い浮かべるかもしれないが、当時は絵葉書として使える広告が数多く出回っていた。菓子、粉ミルク、着物、日本酒など様々な広告絵葉書が見られる（図22、図23、図24）。これらは、近年のアドカードと同じ目的のものである。

アドカードとは「カフェ・レストランやCDショップ、スポーツショップ等、街のおしゃれスポットで無料でもらえる広告用ポストカードのこと。広告でありながら、アート性が高く、しかも枚数限定だから街のトレンドリーダー達の間で大人気。コレクターが急増している。」⁽¹⁷⁾ ものであり、当時も同じよう



図21 明治天皇（京城日報製）



図22 モロゾフ



図23 月桂冠

このような社会状況のなかで日露戦捷絵葉書が発行された。新聞の号外などによって、戦局の報道を享受していた国民は、絵葉書の画像の持つリアルさという初めての経験に狂喜したのだろう。勿論、これらの絵葉書は通信省発行ということで、戦意高揚の意味もあったと考えられる。

その後、第一次世界大戦後の時期にかけて、大戦景気で産業資本が急速に発展し、都市への人口集中、都市労働者の増加、新中間層の出現、消費者行動の大衆化などの大衆社会・大衆文化現象を顕在化させた。新聞界では『報知新聞』『時事新報』『東京朝日新聞』などの報道新聞が互いにしのぎを削りながら目覚ましい発展を遂げるようになる。この結果、明治前期に見られた知識人層＝「大新聞」、庶民読者「小新聞」という図式が描けなくなり、幅広い階層の人々が同じような新聞を手にし、同じメディアに接するようになった。⁽²²⁾

絵葉書はこの時期、ニュース伝達のメディアとしての要素を持つ。その上で絵葉書は画像を伝達するメディアとして庶民に期待されていた。絵葉書以前のニュースを伝達する画像メディアとしては、日清戦争に多くの画家が従軍し、描かれた新聞錦絵が知られている。ニュースを画像で伝えるという意味では、絵葉書の新聞錦絵と似たような要素を持っているだろう。しかし、錦絵と絵葉書の間には、描写と撮影という、リアルさのうえで大きな違いがある。この違い、絵葉書の持つリアルさによって、この後約20年間、絵葉書はニュース媒体としての役割を果たすことになる。

さらに前述のように絵葉書は葉書としての送られるという役割を果たすことによって、ニュースを伝播させる働きをもった。図12の絵葉書は画面によってその具体的な画像を示し、その上で、自宅は無事であることを伝えている。このように、この時代において、絵葉書は差出人がニュースを伝えたいと考えた特定の人（受取人）に対し、リアルな画像を使ってニュースを伝えるメディアであったのである。

大正中期になると、ニュース絵葉書はあまり発行されなくなる。これは他のメディアとの関連があるだろう。この時期、新聞に掲載される写真の増加、大正11年の週刊誌『旬刊朝日』『サンデー毎日』の創刊、さらに昭和に入ってからにはニュース映画の登場とリアルさを伝えるメディアが発達する。このことによって、絵葉書による差出人から受取人という二つ目のメディアを介さずとも、ニュースを画像・映像のイメージとして広がっていった。このため、ニュースの画像が絵葉書に載る必要がなくなり、ニュース絵葉書は退行したのではないだろうか。また、この件に関しては、日露戦争以後の絵葉書ブームが一段落し、なにもかもが絵葉書の題材になったという時期が終わったということとも要因の一つと推測できる。しかし、絵葉書の差出人がニュースを伝えたいと考えた特定の人（受取人）に対し、リアルな画像を使って情報を伝えるメディアである、という側面はその後名所絵葉書の盛行に引き継がれていく。

おわりに

本稿では絵葉書が持つマスメディアとしての役割について論じてきた。絵葉書は現在とは比較できないほど多種多様で、当時の社会において重要なメディアであった。その中で絵葉書は数少ない画像を伝えるメディアとしての役割を果たしたのである。絵葉書のこのような役割は、絵葉書の持つ情報伝達能力の高さ、特に差出人と受取人を結び付けるメディアとしての能力の高さに起因したものであるだろう。

本稿では絵葉書の隆盛の主役となった「名所絵葉書」については取り上げなかったが、「名所絵葉書」も、当時の人々の関心や社会の状況を知る上での好資料になり得る。今後の課題にしたいと思う。

笹川コレクションについて

新潟西堀で餅屋を営みながら郷土史研究に従事されていた笹川勇吉氏から、新潟県立歴史博物館（寄贈当時は新潟県企画課社会文化施設建設室）に2万3千枚を超える絵葉書が寄贈された⁽²³⁾。この絵葉書コレクションは笹川さんのご自宅と少し離れた家屋の一室に整理されないままずっとたかく積み重ねられていた。笹川さんは戦前から絵葉書を収集されていたそうであるが、応召中、新潟市が3箇所目の原子爆弾の標的になっているという情報により、新潟市からの退去命令が出た際、奥様がそれらの絵葉書をやむにやまれず処分したそうである。その後、復員した笹川さんは古書店などからの購入などにより、再度、絵葉書の収集を始められた。その結果、収集されたのが「笹川コレクション絵葉書」である⁽²⁴⁾。

本稿はこの笹川コレクションの資料紹介を兼ねるものである。

註

- (1) 対談 加藤秀俊・前田愛『明治メディア考』中央公論社 1980 i頁
- (2) 須藤功編『写真でみる日本生活図引』序 弘文堂 1989
- (3) 佐藤健二「絵はがき覚書」『風景の生産・風景の解放 - メディアのアルケオロジー』講談社メチエ5 1994
佐藤氏のこの著作以前の研究史については佐藤氏の論考に拠った。
- (4) 小森孝之『絵葉書 明治・大正・昭和』国書刊行会 1978
本書は、絵葉書は世相を写すものである、という視点で絵葉書が集成されており、絵葉書を資料として扱うという視点が見え、当時としては先駆的な集成であるだろう。また、さまざまなジャンルの絵葉書が数多く所収されており、当時の絵葉書の概観を見るに有効である。
- (5) 斎藤多喜夫「絵葉書からのメッセージ - 100年前の横浜・神奈川」『100年前の横浜・神奈川 絵葉書で見る風景』有隣堂 1999
- (6) 島津俊之「師範学校による絵はがきの収集と郷土教育 - 和歌山県の師範学校を事例に - 」『紀州経済史文化史研究所紀要』第8号 1998
- (7) 今野由佳里「絵葉書の流行」『札幌の歴史』第28号 1995
- (8) 佐藤前掲著 60～63頁
- (9) 新宿歴史博物館特別展図録『巷の目撃者～絵はがきがとらえた明治・大正・昭和～』1999
- (10) T. フジタニ『天皇のページェント 近代日本の歴史民俗誌から』NHK ブックス 1994
- (11) T. フジタニ前掲著 122頁
- (12) 石井研堂『改訂増補明治事物起原』1944 963頁
「陛下の真の御写真として見奉るべきは、明治五年御入京の砌、内田九一が仰せを受け、巻纒と立纒との二様の御衣冠姿を謹写しまゐらせしものと、其後同じ内田が御軍服制定の際、初めて御着服なりし尊容を謹写せるものと、三十八年青山に於て挙行ありし凱旋大観兵式に際し、御馬車にて御閲兵の御事ありしを、小川一真が陸軍当局の命を受けて謹写し奉りしものと、以上僅に四種に過ぎず」
- (13) 多木浩二『天皇の肖像』岩波新書 1988 114～115頁
「天皇の写真を自由に販売することはもちろん、所有さえ禁じるほど、徹底した肖像の独占管理を行ったのである」明治後期になるとここまで厳しい管理はなされていなかったと思われるが、天皇の写真が管理下に置かれたことは間違いないだろう。尚、天皇の肖像の絵葉書以外でも三の丸尚蔵館に展示してある献上写真と同じ絵葉書も見られ、宮内庁所有の写真を題材にした絵葉書が多数存在していたことが推測される。
- (14) 多木浩二 前掲著 215～216頁
「複製してもよろしいという許可を出すには、政府は、「御真影」は“写真”である以上、ただ一点しかない替えがたい貴重品というよりは、あくまで写真という、何枚でも焼き増しできる複製技術の産物であるという、まことに確かな認識をもっていなければならなかった。だから「御真影」の聖性は、その取り扱いの儀礼から生じると考えていたはずである。」

- (16) 絵葉書が認可された直後、裏面への宛名差出以外の記入は禁じられていたが、明治40年に全体の1 / 3に文章を書くことが認められ、大正7年に1 / 2に拡大された。
- (17) アドカード HP <http://www.adcard.co.jp/index2.htm>
- (18) アドカード HP 前掲
- (19) 電通広告資料収集事務局「昭和広告史シリーズ 昭和を開いたアドマンたち 金融恐慌から幻の万博まで」展覧会チラシ 1992
- (20) 小学館『ENCYCLOPEDIA NIPPONICA 2001』「絵葉書」挿絵
- (21) 日露戦争期の状況については、井口和起『日露戦争の時代』歴史文化ライブラリー41 吉川弘文館、1998 『岩波講座日本通史』第18巻 岩波書店 1994 などを参照した
- (22) 山本武利「マスメディア論」『岩波講座日本通史』第18巻 岩波書店 1994
山本武利『叢書・現代の社会科学 近代日本の新聞購読者層』法政大学出版局 1981
- (23) 笹川氏は生前、新潟市に関する絵葉書を新潟市郷土資料館に、それ以外の絵葉書を県立歴史博物館に寄贈するご意向があったが、コレクションが未整理のため、双方に混入しているものが多く見られる。このため、双方の仮の整理が終わった段階で御遺志に沿った形にする予定である。
- (24) 五百川清「笹川勇吉翁 絵葉書コレクションの世界 - 近代新潟 - 一市井人の心象にふれて」『郷土新潟』40号